慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	グリム兄弟における二重のフォルク概念 : ヘルダーからの継承として
Sub Title	The ambiguous Volk concept in the Brothers Grimm : as an inheritance from Herder
Author	大保, 瑶輔(Obo, Yousuke)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2023
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.96 (2023.) ,p.[1]- 15
JaLC DOI	
Abstract	Ziel dieser Abhandlung ist es, die Beziehung zwischen Herders Volksbegriff und dem Volksbegriff der Brüder Grimms zu klären. Dabei zeigt es sich, dass Herder und die Brüder Grimm einen zweideutigen Volksbegriff – „Volk“ als Herkunftsund Zukunftbegriff – teilen. Das „Volk“ ist ein vieldeutiger, an geschichtliche und soziale Umstände gebundener Begriff. Johann Gottfried Herder führte hinsichtlich diesem Begliffs eine entscheidende Wende herbei. Jacob und Wilhelm Grimm waren in vierlei Hinsicht von Herder beeinflusst, und scheinen deshalb auch den Volksbegriff Herders übernommen zu haben. Die Gemeinsamkeiten zwischen Herder und Grimm lassen sich folgendermaßen zusammenfassen: Zum einen stellten beide das „Volk“ und die Gelehrten einander gegenüber. Herder forderte in seiner „Philosophie der Menschheit“ von den Gelehrten, insbesondere den Philosophen der Aufklärung, den Völkern in der Sprach der Völker zu erzählen. Ähnlich bezeichneten die Brüder Grimm Naturpoesie als „Poesie der Ungebildeten“, der sie durchaus Bedeutung zuerkannten. Zum anderen gaben Herder und die Grimms dem Volksbegriff neue Orientierungen. Herder begriff das Volk nicht nur als Ursprungs-, sondern auch als Zielkategorie. So bedeuteten „Volkslieder“ für ihn nicht nur „Lieder aus dem Volk“, sondern auch „angemessene Lieder, zum Urbild zurückzuführen“. Ähnlich galt den Grimms das als die „Qulle der Poesie“, und damit als Einheitszustand, auf den die Deutschen in Zukunft vereint werden sollen. Die Gemeinsamkeiten hinsichtlich des Volks begriffs gehen einher mit Ähnlichkeiten in den Auffassungen, was die Erziehung angeht. Es ging ihnen um die Erziehung des Volkes. Herder und die Grimms wollten, mittels Volkspoesie – sei es nun über Volkslieder oder, mit Hilfe von Märchen – erziehen. In dieser Abhandlung geht es daher auch darum, dass die Brüder Grimm auch in ihrem Erziehungskonzept als Nachfolger Herders gelten können.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000096-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

グリム兄弟における二重のフォルク概念
―ヘルダーからの継承として―
The ambiguous Volk concept in the Brothers Grimm
―As an inheritance from Herder―

大　保　瑶　輔*
Yousuke Obo

Ziel dieser Abhandlung ist es, die Beziehung zwischen Herders Volksbegriff und dem Volksbegriff der Brüder Grimms zu klären. Dabei zeigt es sich, dass Herder und die Brüder Grimm einen zweideutigen Volksbegriff – „Volk“ als Herkunfts- und Zukunftbegriff – teilen.

Das „Volk“ ist ein vieldeutiger, an geschichtliche und soziale Umstände gebundener Begriff. Johann Gottfried Herder führte hinsichtlich diesem Begliffs eine entscheidende Wende herbei. Jacob und Wilhelm Grimm waren in vierlei Hinsicht von Herder beeinflusst, und scheinen deshalb auch den Volksbegriff Herders übernommen zu haben. Die Gemeinsamkeiten zwischen Herder und Grimm lassen sich folgendermaßen zusammenfassen: Zum einen stellten beide das „Volk“ und die Gelehrten einander gegenüber. Herder forderte in seiner „Philosophie der Menschheit“ von den Gelehrten, insbesondere den Philosophen der Aufklärung, den Völkern in der Sprach der Völker zu erzählen. Ähnlich bezeichneten die Brüder Grimm Naturpoesie als „Poesie der Ungebildeten“, der sie durchaus Bedeutung zuerkannten. Zum anderen gaben Herder und die Grimms dem Volksbegriff neue Orientierungen. Herder begriff das Volk nicht nur als Ursprungs-, sondern auch als Zielkategorie. So bedeuteten „Volkslieder“ für ihn nicht nur „Lieder aus dem Volk“, sondern auch „angemessene Lieder, zum Urbild zurückzuführen“. Ähnlich galt den Grimms das als die „Qulle der Poesie“, und damit als Einheitszustand, auf den die Deutschen in Zukunft vereint werden sollen.

Die Gemeinsamkeiten hinsichtlich des Volks begriffs gehen einher mit Ähnlichkeiten in den Auffassungen, was die Erziehung angeht. Es ging ihnen um die Erziehung des Volkes. Herder und die Grimms wollten, mittels Volkspoesie – sei es nun über Volkslieder oder, mit Hilfe von Märchen – erziehen. In dieser Abhandlung geht es daher auch darum, dass die Brüder Grimm auch in ihrem Erziehungskonzept als Nachfolger Herders gelten können.

Key words :　Volk, Posie, Romantik, Märchen, Volkslieder
キーワード：民族，民衆，詩，ロマン主義，メルヒェン，民謡

*　社会学研究科　教育学専攻　博士課程１年

0. はじめに

『子どもと家庭のメルヒェン集（Kinder- und Hausmärchen)』を出版したヤーコプ・グリム（Jacob Grimm, 1785–1863）およびヴィルヘルム・グリム（Wilhelm Grimm, 1786–1859）は，ドイツ人のアイデンティティを探究し，それを伝えることによってドイツ人としての自覚を芽生えさせようとしたと言われている。その際，彼らは，ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744–1803）による『民謡集（Volkslieder)』の編集・出版に大きな影響を受け，それを範としたとされる。しかし，グリム兄弟自身がヘルダーについて言及したことがほとんどないこともあり，多くの先行研究は両者についてあいまいな影響関係を指摘するにとどまっている[1)]。グリム兄弟の往復書簡を研究した Lichtenstein（1928）によれば，グリム兄弟がヘルダーおよびその著作に触れたのは 1805 年であるという[2)]。この年にヤーコプ・グリムは，パリの図書館で古文書の調査に携わったことを契機にして，法学者になる道を捨てて古代ゲルマン文学の研究者になることを決心し，その翌年から後にメルヒェンの収集を始める。ヘルダーの著作との出会いが，グリム兄弟の研究の方向性を決定づけた可能性はあるものの，確証には至らない。

そこで本稿では，鍵となるフォルク（Volk）概念に着目し，グリム兄弟の教育思想に迫ることにする。「フォルク」という語はきわめて多義的であり，非常に和訳が難しいドイツ語である。本稿では基本的にカタカナで表記するが，文脈によって「民衆」,「庶民」,「民族」,「人民」,「国民」といった意味に分かれ，時にはこのうちの複数の意味を同時に持つこともある。

グリム兄弟の思想研究のなかでフォルク概念に注目した先行研究として，村上（1985）によるものが挙げられる。村上は，フォルクの概念史は書かれるべくして書かれていないと述べたうえで，その欠を補う予備作業としてグリム論を展開している[3)]。村上のこの論考では，中世におけるフォルクという語の用法や兄弟の師フリードリヒ・カール・フォン・ザヴィニー（Friedrich Carl von Savigny, 1779–1861）のフォルク概念との関連について触れられる一方で，グリム兄弟に大きな影響を与えたと考えられるヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744–1803）についてはほとんど触れられていない。グリム兄弟とヘルダーにおけるフォルク概念の差異に着目した先行研究には，川原（2014）のものがある。川原は，両者のフォルク概念，および民衆文学（Volksdichtung）についての考えの差異を明らかにしている。川原によれば，ヘルダーはドイツ人がひとつの国民となるために，文明の圏外の遠いところにフォルクの原像を見出すことが必要だと主張したとされる。すなわち，内のフォルクを外に見出し，外のフォルクを内に照応させるという考えがヘルダーの『民謡集（Volkslieder)』にあったとしている。一方で，川原は，グリム兄弟の場合，外部の文学を内部に取り込み同化することで，新たな外部を生み出した点で，ヘルダーと異なっていると述べている[4)]。たしかに，ヘルダーとグリム兄弟との間には差異がある。しかし，その一方で，両者の間には単なる影響関係に留まらない，重要な共通点があると考えられるのである。

したがって，本論では，フォルク概念に着目し，ヘルダーがその概念に与えた影響とヘルダーとグリム兄弟の間の差異を論じた上で，その共通点を明らかにする。ヘルダーは，『民謡集（Volkslieder)』を著すことによって，グリム兄弟の古代のポエジー[5)]に対する関心を呼び起こし，思想面でも大きな影響を与えたのみならず，近代的なフォルク概念の成立そのものにも大きく関わったと考えられるのである。グリム兄弟は直接ヘルダーの名を挙げたことはほとんどない。しかし，この両者の間にはフォルク

という概念を通じて共通する（教育）思想が流れていると考えられるのである。そこで本論では，まず，ヘルダーのフォルク概念を，概念史にしたがって記述し，ヘルダーがその概念にいかなる影響を与えたのかを考察する（1)。次に，グリム兄弟のフォルク概念について論じ，彼らが師ザヴィニーとも異なるフォルク概念に基づいて『子どもと家庭のメルヒェン集』を編纂したことを明らかにする（2)。続いて，ヘルダーとグリム兄弟のフォルク概念の異同を明らかにし，彼らの間にフォルクの二重性という重要な共通点があることを結論付ける（3)。

両者のフォルク概念に着目することで，ヘルダーとグリム兄弟のフォルク概念の共通点と差異を明確にし，それによってヘルダーとグリム兄弟が「フォルクの教育」という視点を共有することを明らかにすることが本論の目的である。本研究の意義は，通常教育思想としては語られないグリム兄弟という後期ロマン主義の思想を，ヘルダーの延長線上として教育思想上に位置づける手がかりを提供することである。

1．ヘルダーとフォルク概念

ここでは，ヘルダーとフォルク概念について論じる。ヘルダーは，民謡集（Volkslieder）を出版し，グリム兄弟の思想に大きな影響を与えたばかりか，フォルクという概念それ自体の変容を引き起こしている。以下ではまず，フォルクの概念史的記述から始め，ヘルダーがその概念といかに関わったのかを確認し，その後ヘルダー自身のフォルク概念を考察することにする。

グリムの『ドイツ語辞典』によれば，フォルク（Volk）というドイツ語は古スラヴ語 “plūkū“から借用されたものであり，もともと「戦士の軍勢，軍隊」を意味していた[6)]。そこからフォルクは，ある個人の支配，あるいは指揮の下にある人々を指すようになり，家庭における子どもや，とりわけ奉公人などを意味する用法が表れた。とりわけ重要な変化は 18 世紀後半と 19 世紀前半に起こったとされ，美学哲学的な運動が，同時に上流社会のものであった教養（bildung）の価値を引き下げ，対照的にフォルクという概念を，価値ある詩文学的な財の根源，創造的かつ想像力に満ちた生の根源，そして自然に条件づけられた風習の根源として高尚なものにしたという[7)]。ここで明言はされていないが，この運動を牽引した人物こそ，まさしくヘルダーであると考えられる。『歴史基本概念事典（Geschichtliche Grundbegriffe)』によれば，ヘルダーはフォルク概念を包括的な仕方で歴史的にも，また文化的にも基礎づけることによって，この概念に今まで知られていない深い次元を授けたとされる[8)]。ヘルダー以前のたいていの文献においては，フォルクは神学的，軍事的，地理的な意味（神の民 Gottesvolk，軍隊 Kriegsvolk，住民 Bevölkerung）で用いられるか，無産者や無教養なものまでを含んだ様々な規模と構成からなる社会的集団を指していた。こうした「下層民」を指す用法は 18 世紀の始めまで支配的なものであったが，ヘルダーはフォルクを言語，魂，性格を付与された集団的個性へと価値を引き上げることによって，この概念に「コペルニクス的転回」をもたらした[9)]。その結果として，フォルクは国民（Staatsvolk）もナチオーン（Nation，国民）も，また住民（Bevölkerung）も包括しうる広い概念となった。

また，グリムの辞書において，こうした運動をさらに進めたのはロマン主義から生じた文献学であり，その際，とりわけ啓蒙主義の時代に無教養な人々とされ，軽視されてきたフォルクという概念の新たな地位が創出されたとされる[10)]。フランス革命の理念や，リベラルな運動のなかで，フォルクという語の再評価が生じた。フォルクという語の高尚化は国民意識の目覚めによって，フランス革命以後の

展開と結びつけられ，神聖ローマ帝国の破滅とナポレオンに対する戦いを通して強力に要求された。

ライブホルツ（1965）は，フォルクという概念を大きく二つの意味に分けている[11]。一つは現実に存在する人々の集団を指すものである。この場合のフォルクは，ナチオーンと対立するものであり，自然によって与えられたものであるとされる。とりわけ支配層から区別する場合は「庶民（das gemeine Volk）」と呼ばれる。そしてもう一つは，政治的観念的な統一体としてのフォルクである。この場合，ある観念的な価値，たとえば共通の文化，歴史，言語によってフォルクは一個の共同体として現れる。ライブホルツは，この後者の意味でのフォルク概念の形成に際してロマン主義が影響を与えたと述べている[12]。

ここで，ナチオーンという語との区別が必要になる。ナチオーンは普通「国民」や「国家」と訳されるが，フォルクもまた「国民」とされる場合があり，両者は時に同じ意味で使われる。たとえば，グリムの『ドイツ語辞典』では，「ナチオーンとは，ある国，ある大きな国家全体の（生まれついた）フォルクである」[13] とされ，『歴史基本概念事典』でも，フォルクとナチオーンはともに「政治的な行為統一体の自己組織化および自己知覚を示し，また同時にその都度そこから除外された他の行為統一体あるいは他集団を示している」[14] とされる。しかし，その一方で，上述のようにフォルクとナチオーンは対立するものとしても記述される。ライブホルツは，フォルクが自身の政治的・文化的価値に目覚め，自己の特性と特質とを他のフォルクに対して強調し，歴史的に形成されることによってナチオーンへと成長すると述べている[15]。つまり，自然的な所与であるフォルクに対して，ナチオーンはフォルクの自覚によって歴史的に形成されるものであるとされている。そのようにして，フォルクの自覚によってナチオーンへと展開していくため，そうした自覚が未熟だった時代，すなわち領邦国家に分かれ，フォルクのアイデンティティを模索する段階にあった 18 世紀のドイツにおいては，フォルクはいまだナチオーンへと至っておらず，その途上にあるといえ，ドイツの国民意識の形成は 19 世紀を待たなければならないのである。実際，『歴史基本概念事典』においても，ヘルダーがフォルクとナチオーンをほぼ同義に用いていることが指摘されている[16]。

以上のように，フォルクという概念は社会的・歴史的変化と密接に結びついている。ヘルダーやグリム兄弟が生きた時代は，まさしくドイツのフォルクがナチオーンへと歩み始めた時代であったといえる。彼らは，上述した 18 世紀から 19 世紀にかけて起こった「美学哲学的な運動」の当事者であり，フォルク概念の高尚化に寄与した。とりわけヘルダーはフランス革命を目の当たりにし，隣国において国民国家が成立する様を見た。フランスではドイツとは異なり，革命をとおして単一の国家としての国民意識が早くに確立した。以下では，そうした経験を経たヘルダーがいかなる意味でフォルクという語を使用していたのかを考察する。

嶋田（2007）は，ヘルダーはフォルクという語を基本的に 3 つの用法で用いていると分析している[17]。一つめは人類全体を指す用法であり，「フォルクは地理的にも風土的にも互いに隣接して住む一つのフォルクである」[18] という言葉に示されている。二つめは民族や国民という，言語や文化を共有する集団を指す用法であり，「およそあるフォルク，それも未開なフォルクは自らの父祖の言語ほど愛するものを持っているだろうか」[19] というヘルダーの記述にはこうした意味が表れている。そして三つめは身分や学識に関わるものであり，庶民や民衆を意味する用法である。ヘルダーの「哲学はそもそもフォルクのもののはずであり，フォルクを中心に置かなくてはならない」[20] という言葉は，庶民としてのフォルクの用法に言及している。

この第三の用法を軸にして，ヘルダーは自らの哲学を「人間の哲学（Philosophie der Menschheit）」すなわち人間学として構想する。ヘルダーは，「学者・知識人（Gelehrte）」と対立する庶民（フォルク）の立場から哲学を捉え直すことを目的として，『哲学はどうすればフォルクにとってより一般的で有益なものになりうるか（Wie die Philosophie zum Besten des Volks allgemeiner und nützlicher werden kann.）』（1765）と題した論文を発表した。濱田（2014）は，ここに表されたヘルダーの姿勢を，「庶民に向かって，庶民の言葉と考え方で語りかける」という「下から哲学すること」と表現している[21)]。このことは，哲学という手段によるフォルクの啓蒙を意図していたことを示唆している。ヘルダーは啓蒙の時代にあって，その知の在り方を批判的に捉えた。啓蒙主義的な「上からの啓蒙」ではなく，「下からの啓蒙」を目指していたといえる。ヘルダーは近代において，フォルクが賤民（Pöbel, Kanaille）といった低い階層と同一視されていることを問題視していた。嶋田（2007）は，ヘルダーがフォルクの実体を学者や聖職者を含めた「市民（Bürger）」という部分に限定することによって，その低い地位を改善し，民族とも賤民とも異なる新たな第三のフォルク像を案出・発見することを意図していたと主張している[22)]。これらのことから，民謡（Volkslieder）の担い手は学者などを含めた市民としてのフォルクであるとされる。ヘルダーがその『民謡集』に込めた意図は，学者や聖職者が民謡によって市民を啓蒙することであったと嶋田は主張する[23)]。

また，嶋田によれば，民謡という表現には上記３つの用法全てが含まれているという[24)]。というのも，第一に詩作をするという行為は人類全体の特性であり，第二に同時にそれらはある民族の固有性の表現であり，また第三に王侯貴族や学者の私有物ではなく民衆による芸術であるためである。

さらに，全集の編集者ウルリッヒ・ガイアーは，ヘルダーのフォルク概念が起源のカテゴリーであるのみならず，目的のカテゴリーでもあると述べ，民謡とは「フォルクからの歌」だけでなく，「現在の不自然になった状態からフォルクそれ自体の原像（Urbild）へと連れ戻すのに適している歌」をも意味しているとされる[25)]。つまり，ここには民謡によるフォルク（市民）の教育という視座が含まれていることが示唆されている。このことは，彼の人間学が志向していた「下からの哲学」の具体的な表れとみなすこともできよう。

2. グリム兄弟のフォルク概念

以上，ヘルダーとフォルク概念について論じた。ヘルダーはフォルク概念を歴史的・文化的に基礎づけ，それを包括的な概念にし，その価値を引き上げたのだった。彼の『民謡集』はそうしたフォルク概念に基づきつつ，起源としてのフォルクと目的としてのフォルクという二つの方向性が含まれていることが明らかとなった。

ヤーコプ・グリムは，1846 年の第一回ゲルマニスト会議において，「フォルクとは言語を共有している人間の総体である[26)]」と端的に述べ，さらにこうしたフォルクの説明は「遅かれ早かれ存在する，〔.....〕必ずや到来する未来へと視線を向ける[27)]」ものであるとしている。これが語られたゲルマニスト会議は，ドイツ統一の必要性を訴えるゲルマン学の研究者たちが集まって開催された。彼らはドイツ語がゲルマン語のひとつであり，同じ言語を話すフォルクもまたひとつであるべきだ，という考えを共有していたとされる[28)]。ヤーコプはこの会議の議長に選出されており，上述したヤーコプの言葉は，そうした考えを代表したものといえる。彼もまた，ドイツの統一，すなわち言語を介してドイツが一個のフォルクとしてまとまることを意図していたと考えられる。

このように，グリム兄弟においてフォルクは未来指向の概念として用いられる。このことは，グリム兄弟の師ザヴィニーとの比較から，さらに浮き彫りになる。グリム兄弟はその師ザヴィニーの歴史法学から多くのことを学んだ。ヤーコプ・グリムがドイツ固有の法や言語の研究を志すことになったのも，法は言語と同様にフォルクの共通の確信の中に存在するというザヴィニーの所説に影響を受けたものであるとされている[29)]。しかしその一方で，「フォルク」概念については，ザヴィニーの影響を受けつつも未来指向という新たな含意を見出したグリム兄弟の独自性が認められるのである。

ザヴィニーは『立法と法律学に関する我々の時代の使命について（Vom Beruf unserer Zeit für Gesetzgebung und Rechtswissenschaft）』（1814）のなかで歴史法学の綱領的な概説を与えている。

> さしあたり，記録された歴史をみると，市民法はすでにある性質を持っていることがわかる。すなわち，言語や習俗，制度と同様に，フォルクに固有のものだという性質である。これら諸現象は疎隔された存在ではなく，あるフォルクの個々の力，および活動であり，本来的に不可分に結びついているが，ただ我々が観察するところにおいて，特殊な性質を持つものとして現れるのである。これらの諸現象をひとつの全体として結びつけるものは，フォルクに共通した確信であり，内的必然性という共通した感情である。この感情は，偶然と意志決定によって成立する一切の思考を排除するのである[30)]。

このようにザヴィニーは，市民法が言語や習俗，制度と同様にフォルクに固有のものであり，本来的にはフォルク共通の確信，内的必然性によって不可分に結びついていると述べている。こうした考えはヤーコプの法思想とも共通しており，師ザヴィニーから受け継いだ思想であるといってよい。そして，ザヴィニーは法とフォルクとの関係について，以下のように述べる。

> しかし，法とフォルクの本質および性質とのこうした有機的連関は，時代の進行によっても確証され，この点においても，法は言語と比較すべきものである。言語と同様に法においても，一瞬たりとも絶対的な静止状態などありはせず，法は，フォルクのその他のすべての活動と同様の運動と展開とにしたがうのである。そしてこの展開はフォルクの最初期における現象と同じく，内的必然性という法則に立っている。つまり，法はフォルクとともに成長し，フォルクとともに自己を形成し，フォルクがその個性を喪失するならば法も最後には死滅するのである[31)]。

ザヴィニーは，法と言語がフォルクとともに絶えず展開し，成長し，最後にはともに死滅すると述べている。これこそがザヴィニーが創始した歴史法学の中心的な思想であり，ヤーコプはこれをとりわけ言語に適用し，彼のポエジー概念を論じている[32)]。こうしたザヴィニーの法学に表れているのは，フォルクの歴史性を主張する考えである。

こうした歴史法学の思想は自然法を唱える非歴史法学に対して主張された。非歴史法学派は，法というものはいつ何時にでも立法者によって任意に産出され得るものと考え，それに対して，サヴィニーら歴史法学は，法の内実がその国民の過去すべてによって必然的に規定されるために任意に変更されえない，と考える。カントロヴィッツによれば，歴史法学者にとって，あらゆる法は，ある国民の言語や慣習，制度と同じく，その国民特有の性格，後に「民族精神（Volksgeist）」と呼ばれるものによってのみ，

規定されることになるとされる[33]。堅田（2007）は「普遍」の思想である啓蒙主義的な近代自然法論を批判するものとして，歴史的な「個別」を重視する歴史法学が登場したと述べている[34]。

だが，その一方で，歴史法学のなかにも，ロマニステンとゲルマニステンという2つの立場があった。ロマニステンはローマ法をもとにドイツ法学の体系化を目指し，ゲルマニステンはゲルマン法を対象にしてドイツの個別性を確認することを目的とするものであり，ザヴィニーは前者，ヤーコプ・グリムは後者にあたる。堅田は，ヤーコプの法学が，ザヴィニーとロマン主義的心情を共有しながらも，一貫してゲルマン法にこだわることでザヴィニーのそれとは様相を大いに異にしていると述べる[35]。ローマ法は6世紀前半に制定されて以来，ドイツ全土の普通法として通用していたため，古来よりの法ではあるが，個人主義的な法であり，その意味では近代法といえる。それに対してゲルマン法は団体主義的な法であり，前近代の法といえる。堅田は，ザヴィニーが古代・中世のローマ法を整理し，現代ローマ法を提示することで新たな「普遍」を持ち出そうとした一方で，ヤーコプはゲルマン法の団体主義的性格のうちに近代を超える可能性を見出し，それによって近代を否認することでポストモダン的なもう一つの歴史法学を提示したと分析している[36]。

そのような歴史法学のうちにおける立場の差に加えて，ヤーコプ・グリムはフォルクの「超歴史性」を主張している。ザヴィニーが刊行した『歴史法学雑誌』に寄稿した論文『法の内なるポエジー（Poesie im Recht）』（1815）のなかで，ヤーコプは法とポエジーの起源について以下のように述べているのである。

> 法とポエジーが一つの揺籃から育ったというのは，信じがたいことではあるまい。両者を別々にとらえてみても，所与の要素，伝来の要素を含んでいる点に共通性が認められる。その要素は，それぞれの具体的な歴史と結びつきながらも，超歴史的といえるものである。法とポエジーはいずれも，単なる制作やいい加減な案出とは無縁である。両者はいずれも二つの重要な起源をもつ。すなわち不可思議と確信である[37]。

このように，ヤーコプは法とポエジーが歴史と結びつきつつも超歴史的な要素を含んでいると述べている。この後ヤーコプは，法とポエジーがフォルクの慣習と深いつながりがあることを，慣習法や法格言といったポエジーを含んだ法の分析を始めるのである。村上（1985）は，このようなフォルクの超歴史性を強調するヤーコプの主張はザヴィニーの歴史主義からの離反を意味していると述べている[38]。

また，ザヴィニーはドイツにおける民族（フォルク）について述べる際，「諸民族（フェルカー，Völker）」という複数形を用いている。ザヴィニーは，ローマ法[39]の継受によって自己の国民性を失ってしまったのだと主張するドイツの法律家に対して，次のように反論している。

> いにしえの〔神聖ローマ帝国の〕発展のように完成した国民的な発展といったものも，自然によって近代の諸民族に示された道とは異なっていた。諸民族の宗教がそれらに固有のものではなく，諸民族の文学が外来の強力な影響を免れなかったのと同様に，諸民族にとって，そして共通の市民法〔ローマ法〕は不自然なものではなかった[40]。

ドイツの諸民族が，ドイツ諸民族固有の宗教ではないキリスト教の影響を受け，文学的にも外国の影響を受けたのと同様に，ローマ法の受容が不自然なものではないというように述べている。ザヴィニーは，ローマ法の受容によってドイツの国民性が失われたのではなく，すでに国民性を失っていたためにローマ法を必要としたのだと主張している。つまり，このような複数形「フェルカー」の使用は，ドイツが一個の「フォルク」をなしていなかったというザヴィニーの考えによるものであると考えられるのである。逆に，ザヴィニーが単数形のフォルクを用いるのは，ローマにおいてローマ人を指す場合である。

それに対して，グリム兄弟はドイツの民族を指す場合であっても，「フォルク」という単数形を用いる。それは彼らがフォルクを超歴史的な，ある種の理念として捉えていたからにほかならない。グリム兄弟は，ザヴィニーとは異なって，ウィーン会議を経てなお 35 の領邦に分かれていたドイツにおいて単一のフォルクを想定していたのである。それは，超歴史的に，理念として存在すべき「民族」である。こうした超歴史的な意味でのフォルクこそ，ゲルマニスト会議でヤーコプが提示した未来志向のフォルク概念であるといえる。しかし，それと同時に，フォルクは現に存在する「民衆」という，ポエジーを保存する素朴な民衆はまぎれもなく歴史と結びついた，具体的な人々をも意味しているのである。ヤーコプは『法の内なるポエジー』のなかで以下のように述べる。

> 今日でもなお田舎の人々の習俗や言語や慣習は，古い伝説からも古い法のみずみずしい本性からもさほどかけ離れたものではない。われわれ庶民（gemeines volks）の言葉や流儀のなかには，時間の長い経過にもかかわらず，古事物の道につうじる多くの痕跡がなおもみられる。なにしろ言語という宝の山全体が，忘れられ失われたかにみえる多くのことがらを解明するための，きわめて注目すべき手だてを提示しているのである[41]。

ここで述べられているのは，歴史を貫いて今なお生きるポエジーを，言語という手だてをとおして解明するという，グリム兄弟の研究理念そのものである。そうしたポエジーはまさに，田舎の人々，すなわち素朴な民衆（フォルク）の習俗や言語そして慣習にあるとされている。

以上のことから，グリム兄弟のフォルク概念について，次のようにまとめることができる。すなわち，グリム兄弟において，ザヴィニーとは異なる超歴史的なフォルク概念とザヴィニーから直接受け継いだ思想に基づく歴史的なフォルク概念とが両立している。前者は歴史を貫いてドイツに存在する単一の「民族」であり，後者はそうした民族の痕跡をポエジーとして保存している素朴な人々，「民衆」である。この 2 つの用法はライブホルツ（1965）が述べた，フォルク概念の分類にも対応している。すなわち，前者の「民族」としてのフォルクは観念的な統一体としてのフォルクを，後者の「民衆」としてのフォルクは現に存在する人々の集合としてのフォルクを表している。

こうしたグリム兄弟のフォルク概念は，『子どもと家庭のメルヒェン集（Kinder-und Hausmärchen，いわゆるグリム童話）』にも表れている。というのも，グリム兄弟は，自身のメルヒェン集について，序文の中で「聖書は別として，我々はこれよりほかにフォルクが作り上げた，健全で力強い本を知らない」[42] と述べているように，まさしく上述したような素朴な民衆によってつくられたポエジーとしてメルヒェン集を編纂したと考えられるためである。また，グリム兄弟は，この『子どもと家庭のメルヒェン集』を「教育の書（Erziehungsbuch）」として編んだと述べており，彼らはこのメルヒェン集が教育

のための媒体となることを意図していた[43]。このことは，『民謡集』によって市民の啓蒙を目指していたヘルダーと似た視座に立っているといえる。ただし，グリム兄弟が目指していたのは，啓蒙主義的な「市民の形成」とは明確に異なっている。たとえば，啓蒙主義期において児童文学による市民の形成を目指した汎愛派カンペの『新ロビンソン物語』（1779）は，ダニエル・デフォーによる原作を子ども向けの作品へと改作したものであるが，その作品の目標を以下の五つであるとしている[44]。第一に，子どもがこの作品に快さを感じること。第二に，家庭生活や自然，人間活動についての基礎知識を導入すること。第三に，博物学を中心とした学問的基礎知識を包摂させること。第四に，徳と敬神への契機を与えること。第五に，子どもの能力を現実世界における活動と成長および幸福の促進に向けさせることである。こうした目標は，市民社会の現実に即した形成をするという意図から定められたものである。しかし，グリム兄弟はむしろ，市民社会から失われつつある民衆のポエジーを収集し，取り戻そうとしている。また，グリム兄弟は，新人文主義のような，普遍的な価値をもつ教養をとおした人間の完成を目的としているのではない。新人文主義は，調和的な諸力の展開，いわゆる「全き人間」の形成を目指した。そのための範をギリシャに求めた新人文主義とは対照的に，グリム兄弟は，祖国に根付いた無教養なもののポエジーを理想とするのであり，普遍性よりもむしろフォルクのもつ特殊なものに価値を置いている。

さらに，グリム兄弟の目的というものは，ナチスの目指した国民の形成でもない。グリム兄弟のフォルク概念には，ナチスのような人種というニュアンスを強調する用法は見受けられない。このことは，メルヒェンの収集の際にフランスのユグノー出身の一家が大きな寄与をしていることからも読み取れる[45]。もし，彼らが人種的な要素をもってフォルク概念の定義を考えていたとすれば，フォルクに根ざしたポエジーの集積であるメルヒェン集に，それらユグノーの人々が語ったメルヒェンは採用されなかったのではないだろうか。「フォルクとは言語を共有している人間の総体である」と述べたヤーコプの言葉どおり，ユグノーの一家によって語られたメルヒェンは，血ではなく言語を共有するという事実をもって，『子どもと家庭のメルヒェン集』に迎え入れられたといえるのである。また，単なる言語能力の育成のみが目的なのでもない。たしかに，ヤーコプ・グリムは，親子の生き生きとした語りによる教育を「最も本質的な教育」であると語っている[46]。しかし，ヤーコプ・グリムは『ドイツ語文法』（1819）第一巻の序文において，以下のようにも述べている。

> きちんと検討すれば，自国語教育というものが余計であって，いつの間にか不利益をもたらすことに気づくであろう。自国語を学校で教育することで子供たちの言語能力の自由な発達が阻害され，自然が定めた姿がかき消されるのだと，私は強く主張したい。まさにこの自然の定めに従ってわれわれは，母乳とともに言語を身体に取り入れてわがものとするのであり，言語は家の父母のもとで大きく成長を遂げるのである。自然や道徳と同じく，言語もふつうとくに意識することがない神秘である[47]。

このようにヤーコプは，自国語教育によって言語能力の自然な発達が阻害されると主張している。このことから，彼らは親子間の自然なコミュニケーションツールとしてメルヒェン集を扱い，そのなかで言語能力が自然に発達することは想定していたと考えられるが，専ら自国語教育のための教材として用

いることは意図していない。さらに，グリム兄弟が標準ドイツ語ではなく，なるべく方言でメルヒェンを収録しようとしたことからも，ドイツ語の洗練を目指していたとは考えられない[48]。

以上のことから，グリム兄弟における教育の目的，それはドイツというフォルクに属しているという自覚を促すことであると考えられる。フォルクに属する自覚と言っても，前述したとおり，フォルクは素朴な「民衆」をも意味するが，そのような民衆になることを人々に求めたわけではない。ここでのフォルクとは超歴史的な理念としてのフォルクを指している。すなわち，過去から現在まで貫いている超歴史的なフォルク，それに自らが属しているという自覚を，都市の市民に対して促すことであるといえる。言い換えれば，それは自国のアイデンティティを知った状態であり，たとえドイツという国家がなかったとしても，ドイツ語で語られた物語，ポエジーを知っているという状態である。いわば，それはドイツのアイデンティティに自覚的な「フォルクの形成」である。ゲルマニスト会議においてヤーコプが意図していた，言語を介してドイツが一個のフォルクとしてまとまることは，このことを指していると考えられる。グリム兄弟の研究は，徹頭徹尾ドイツというアイデンティティを探究する営みであった。彼らは当時の市民社会において，失われつつあった言語やポエジーを民衆のなかから再発見し，再び市民の生活へと還元することを目指したのである。また，この点において，グリム兄弟と初期ロマン派との差異も指摘される。むろん，子どもの持つ内的な力としてのポエジーへの着目，啓蒙主義思想への反発，過去への憧憬など両者に共通している点も多い。しかし，ドイツのアイデンティティを探究するというナショナリズム的関心は，初期ロマン派には見られないのである[49]。

3. ヘルダーとグリムのフォルク概念

以上，グリム兄弟のフォルク概念について論じた。以下では，ヘルダーとグリム兄弟，両者のフォルク概念を比較し，その差異と共通点を分析する。

上述のように，ヘルダーの場合，フォルク概念には三つの用法があった。そのうち，「人類 Menschenvolk」を指す用法はグリム兄弟には見られない。ヤーコプ・グリムにとってフォルクとは第一に「言語を共有している人間の総体」であり，そこには明らかに人類全体が一つのフォルクに属しているという発想は存在しない。また，ヘルダーはフォルクの実体を市民（Bürger）に限定していた。この市民に対する見方もグリム兄弟とは決定的に異なる点である。グリム兄弟は市民をフォルクに含めるどころか，フォルクと対立するものとして考えている。ヤーコプ・グリムは「伝説と，詩および歴史との関係についての考察」（『隠者新聞』19・20 号，1808 年）のなかで，自然詩（Naturpososie，フォルクスポエジーと同一視される）について以下のように述べる。

> しかし，教養（bildung）がその間〔詩と歴史，引用者注〕に踏み込んできて，しかもそれが，間断なく，ますます支配するようになってしまった。そうしたことが起こってしまった結果，詩と歴史が互いに分離し，そこで，古い詩は，それを本来もっていた国民性（nationalität）の集団から，教養などに頓着しない一般民衆（das gemeine volk）のもとへ逃れ，そこに身を隠さざるをえなくなったのである[50]。

ここでは，詩と歴史の間に「教養が踏み込んできた」ために古い詩（自然詩）が，国民（＝市民階級）のもとからフォルクのもとに逃れざるをえなくなったと述べている。「教養ある者」とフォルクが対置

される点はヘルダーと同じであるが，グリム兄弟は市民を教養ある者の側に置き，ヘルダーはフォルクの側に置く。このことには当時の市民が置かれた社会史的状況が関係していると考えられる。

ヘルダーの時代において，市民はイギリス革命やフランス革命といった「市民革命」によって絶対王政を打破し，その権利を獲得したばかりであった。このとき革命を牽引した主体は経済・有産市民層，すなわちブルジョワジーである。しかし，19 世紀になると，医者や弁護士，ギムナジウム教師や大学教師といった，いわゆる教養市民層が台頭し，19 世紀を「市民の世紀」として特徴づけるに至った。グリム兄弟はまさにこの 19 世紀に生き，彼ら自身がこの教養市民層と呼ばれる地位にあった。ユルゲン・コッカ（2000）によれば，18 世紀後半から 19 世紀のはじめにかけて形成された近代市民層は，当初は貴族，無制約の絶対主義，教会の正統主義といったものを共通の敵として統一されていたが，19 世紀が進むにつれて，そうした「上への」区分が徐々に色褪せ，「下層民」や「民衆」「プロレタリアート」といった防衛的な隔絶，すなわち「下への」区分を共有するようになっていった[51]。以上のことから，教養市民層と呼ばれる身分が未発達であったヘルダーの時代において，「教養ある者」の範疇に市民は含まれない。そして 19 世紀，グリム兄弟の時代には，教養は市民のものとなり，さらに「下への」区分が明確になることによって，市民とフォルクの間に線引きが生じたと考えられる。

一方で，ヘルダーとグリム兄弟，両者のフォルク概念の間には共通点が存在する。グリム兄弟のフォルク概念はヘルダーの述べる 3 つの用法のうち，「人類」という意味を指す用法を除いた 2 つの意味で用いている。すなわち，「民族」や「国民」を指す用法と，「庶民」や「民衆」を指す用法である。とりわけ，ヘルダーの人間学構想に現れた，学者と対立する庶民という用法については，グリム兄弟も同じ視点を有していたと考えられる。というのも，ヤーコプ・グリムは，メルヒェンを「無教養なもののポエジー」と述べ，それらはもはや市民のもとからは消え失せ，教養に頓着しない民衆のもとに逃れたと述べているためである[52]。この 2 つの用法は，グリム兄弟において，フォルク概念の 2 つの次元に対応している。すなわち，超歴史的な理念としての民族という意味でのフォルクと，ポエジーを保存する素朴な民衆という意味でのフォルクである。そしてまた，フォルク概念のこうした二重性は，ヘルダーにおいても指摘されていた。ヘルダーは，フォルク概念を起源のカテゴリーとしてのみならず，目的のカテゴリーとしても捉え，民謡に対し，「フォルクからの歌」だけでなく，「現在の不自然になった状態からフォルクそれ自体の原像（Urbild）へと連れ戻すのに適している歌」という性格を付与していることが示唆された。それぞれのフォルク概念の指すものの範囲が異なっている一方で，歴史的なものと超歴史的なもの，すなわち過去と未来，あるいは起源と目的という二つの方向性を持っている点については共通しているといえる。

4. おわりに

以上，本論において，ヘルダーとグリム兄弟のフォルク概念の考察から，彼らの差異とその共通点を明らかにした。ヘルダーの場合，フォルクは人類全体を指すことがあり，また市民をもその範囲に含んでいる一方で，グリム兄弟においては「言語を共有する人々」に限定されている。その反面，両者のフォルク概念が，ポエジーの源泉としての起源を指すと同時に，フォルクの原像を取り戻すという目的を指しているという二重性を共有していることが明らかになった。

本論で示されたフォルク概念の 2 つの次元，すなわち起源と目的，ポエジーの源泉と超歴史的理念というそれぞれの次元は，非常に似た教育観を描いていると考えられる。すなわち，「フォルクに起源を

持つポエジーによる，フォルクの教育」である。ヘルダーは民謡によって，グリム兄弟はメルヒェンによって，この「フォルクの教育」をなそうとしたといえる。両者とも市民（ヘルダーの場合フォルクに含まれる）を教育の対象とし，その目的を，近代市民社会で失われたフォルクの原像を取り戻すこととしているのである。ただし，グリム兄弟の場合，統一ドイツを目指し，一つのフォルクにまとまるというある種政治的な意図もそこに含まれている。グリム兄弟は，ヘルダーから古のポエジーに対する注目と同時に，フォルク概念の二重性を継承し，「フォルクの教育」という視点を獲得したといえるのではないだろうか。

注

1）ヤーコプ・グリムは，『隠者新聞』に寄せた論考の中で，「民謡への大きな愛情が突如として我々の時代に沸き起こった（Jacob, 1965a, S. 400.）」と述べており，明らかにヘルダーを意識した書き方をしている。また，グリム兄弟が刊行した雑誌『古いドイツの森（Altdeutsche Wälder）』はヘルダーの美学論『批判の森（Kritische Wälder）』に，ヤーコプの論文『言語の起源について（Über den Ursprung der Sprache.）』はヘルダーの『言語起源論（Abhandlung über den Ursprung der Sprache.）』に倣ったものであるとされる。
2）Lichtenstein (1928), S. 515.
3）村上（1985），59 頁。
4）川原（2014），151–153 頁。例えば，グリム兄弟は『子どもと家庭のメルヒェン集』に収められたあるメルヒェンに対して，他の地域・時代の類話を取り上げて参照することで当該メルヒェンの起源や来歴を明らかにしようとした。それと同時に，その類話，すなわち異文は，本文からの「逸脱物」とみなされ，メルヒェンの起源に遡る序列の中に組み込まれる。そのことを指して川原は「外部が内部に取り込まれ同化することで新たな外部が生じた（153 頁）」と述べている。
5）ポエジー（Poesie）という概念は，本来「詩」そのものを指すものであったが，ハーマンやヘルダーによって，とりわけ子どもに備わる「詩を創作する根源的な力」として重要な概念となった。こうした内在的な力を指す用法の他にも，文学のジャンルとして，ヘルダーは自然詩（Naturpoesie）や芸術詩（Kunstpoesie）といった区分を用いている。自然詩とは民謡やメルヒェン，伝説といった特定の作者を持たない自然発生的な文学であり，一方の芸術詩は戯曲や小説といった技巧的な文学である。さらにヘルダーは，自然詩と根源的に同じものとして民族詩（Volkspoesie，民衆詩）という概念を導入し，当時無教育な人の詩として軽んじられていた自然詩を，技巧上最も完成された芸術詩に比肩するものであると主張している。グリム兄弟は，以上のようなヘルダーの分類を踏襲しており，同様に自然詩の価値を訴えている。
6）Grimm (1972b), S. 453f. なお，ヤーコプ・グリムは frucht の項を書いている途中で死去したため，volk や後に挙げる nation の項を書いていない。これらの語の説明は兄弟の後任者によるものである。
7）Grimm, Jacob/Wilhelm (Hg.)(1972b), S. 454.
8）Bruner, Otto. u. a. (Hg.)(1992), S. 316.
9）Ebd. S. 283.
10）Grimm, Jacob/Wilhelm (Hg.)(1972b), S. 454.
11）ライブホルツ（1965），1 頁。
12）同上，3 頁。
13）Grimm (1972b), S. 425.
14）Bruner, Otto. u. a. (Hg.)(1992), S. 142.
15）ライブホルツ，5–7 頁。
16）Bruner, Otto. u. a. (Hg.)(1992), S. 316.
17）嶋田（2007），217 頁。
18）Herder (1889), S. 271.
19）Herder (1893), S. 58.

20）Herder (1877), S. 122.
21）濱田（2014），41 頁。
22）嶋田（2007），222 頁。
23）同上，222–224 頁
24）同上，218 頁。
25）Herder, Johann Gottfried (Hg. Ulrich Gaier)(1990), S. 966.
26）Grimm, Jacob（1966）, S. 557.
27）Ebd.
28）橋本孝（2000），290 頁。
29）村上（1985），60 頁。
30）Savigny (1994), S. 8.
31）Ebd, S. 11.
32）ヤーコプ・グリムは，ポエジーの歴史を幼年期・青年期・壮年期・老齢期に分け，ポエジーがフォルクとともに絶えず展開し，成長し，死滅すると考える。そしてとりわけ，フォルクの幼年期に生じる自然詩（Naturpoesie）に注目し，メルヒェンや伝説の研究を重要視するのである。
33）H. カントロヴィッツ（2006），304 頁。
34）堅田（2007），104 頁。
35）同上，106 頁。
36）同上。
37）ヤーコプ・グリム（1989），218 頁。ここでのポエジーは，詩や文学というよりも言語そのものを指していると思われる。
38）村上（1985），65 頁。
39）ここでの「ローマ法」とは，6 世紀前半に東ローマ皇帝ユスティニアヌスの下で編纂された『ローマ法大全』を指す。これは 1794 年にプロイセン一般ラント法が，1811 年にオーストリア民法典が制定されるまで，ドイツ全土の普通法として通用していた。
40）Savigny (1994), S. 37–38.
41）ヤーコプ・グリム（1989），218 頁。
42）Brüder Grimm (1980), S. 17.
43）Ebd.
44）山内規嗣（2010），150 頁。
45）Rölleke（1985）はメルヒェンの情報源を緻密に調べ上げ，その少なくない部分がフランス系の中流階級の家庭に由来することを証明した。岡本（2000）はこのことに関して，そうした提供者が低ドイツの方言で語られたメルヒェンを知っていたことから，彼らが自身の農場で村の住民や小作人，召使などからメルヒェンを仕入れた可能性を指摘している（岡本，2000 年，225–228 頁）。
46）ヤーコプ・グリムは，『学校，大学，アカデミーについて（Über Schule, Universität, Akademie）』（1849）と題する講演において，次のように述べている。「たとえば，父が息子に指で数を数えるのを手本として言って聞かせて，右手の使い方を教えるとき，その際，彼〔父〕はうそや彼に対する反抗を咎め，彼〔息子〕にあらゆる動因で畏敬の念をもって神の名を口にするだろう。学ぶ力はここにおいてもすでに，学習に先立って急速に増加し，学習を超えて伸び出るのであり，子どもの内なる魂，外なる肉体が成長するのであり，そしてそのことは最も美しく，最も簡単で，そして最も確かな教育である（Jacob, 1965b, S. 221）」。
47）ヤーコプ・グリム（2017），111–112 頁。
48）『子どもと家庭のメルヒェン集』序文において，グリム兄弟は「わたしたちははっきりした方言を，よろこんでそのまま残しました。もし，どの話もそうすることができたなら，お話は疑いなく大成功していたことでしょう（Brüder Grimm, 1980, S. 22.）」と述べており，実際 16 篇のメルヒェンが方言のまま収録されている。
49）このことに加えて，Murayama (2005) は，両者の文学において想定されていた読者層の違いを挙げている。すなわち，初期ロマン派の文学はもっぱら大人を読者層としているのに対し，グリム兄弟の『子どもと家庭のメルヒェン集』は，子どもと大人という二重の読者層を想定しているというのである。

50）Grimm, Jacob (1965a), S. 400.
51）コッカ（2000），9 頁。
52）Grimm, Jacob（1965a）,S. 400.

参考文献

Brüder Grimm (1980): *Kinder- und Hausmärchen*. Bd1. Stuttgart: Philipp Reclam jun.

Grimm, Jacob/Wilhelm (Hg.)(1972a): *Deutsches Wörterbuch*. Bd. VII. Tokyo. Sansyusya.

Grimm, Jacob/Wilhelm (Hg.)(1972b): *Deutsches Wörterbuch*. Bd. XII-II. Tokyo. Sansyusya.

Grimm, Jacob (1965a): Gedanken wie sich die Sagen zur Poesie und Geschichte Verhalten. In: *Kleinere Schriften*, Bd. 1. Hildesheim: Georg OlmsVerlagsbuchhandlungs.

Grimm, Jacob (1965b): Über Schule Universität Akademie. In: *Kleinere Schriften*, Bd. 1. Hildesheim: Georg OlmsVerlagsbuchhandlungs.

Grimm, Jacob (1966): Über die Wechselseitigen Beziehungen und die Verbindung der drei in der Versammlung vertretenen Wissenschaften. In: *Kleinere Schriften*, Bd. 7. Hildesheim: Georg OlmsVerlagsbuchhandlungs.

Grimm, Willhelm (1992): Einleitung. Über das Wesen der Märchen. In: *Kleinere Schriften,* Bd. 4. Hildesheim: Georg OlmsVerlagsbuchhandlungs.

Hans-Rüdiger Müller (1997): *Ästhesiologie der Bildung: Bildungstheoretische Rückblicke auf die Anthropologie der Sinne im 18. Jahrhundert*. Würzburg: Königshausen & Neumann.

Herder, Johann Gottfried (Hg. von Bernhard Suphan)(1877): *Herders sämmtliche Werke*. Bd. 1. Berlin: Weidmann.

Herder, Johann Gottfried (Hg. von Bernhard Suphan)(1889): *Herders sämmtliche Werke*. Bd. 13. Berlin: Weidmann.

Herder, Johann Gottfried (Hg. von Bernhard Suphan)(1893): *Herders sämmtliche Werke*. Bd. 17. Berlin: Weidmann.

Herder, Johann Gottfried (Hg. Ulrich Gaier)(1990): *Werke*. Bd. 3. Frankfurt am mein: Deutscher Klassiker Verlag.

Bruner, Otto. u. a. (Hg.)(1992): *Geschichtliche Grundbegriffe*. Bd. 7. Stuttgart: Klett- Cotta.

Lichtenstein, Ernst (1928) : Die Idee der Naturpoesie bei den Brüdern Grimm und ihr Verhältnis zu Herder, In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, Stuttgart, etc.: J. B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung, S. 513–547.

Rölleke, Heinz (1985): *Die Märchen der Brüder Grimm: Eine Einführung*. München: Artemis Verlag.

Savigny, Friedrich Carl von (1994): *Vom Beruf unserer Zeit für Gesetzgebung und Rechtswissenschaft*. Heidelberg: Keip Verlag Goldbach.

Seitz, Gabriele (1984): *Die Brüder Grimm: Leben, Werk, Zeit*. München: Winkler Verlag.

岡本英明（2000）『解釈学的教育学の研究』九州大学出版会。

堅田剛（2007）「サヴィニーとグリムの歴史法学――〈法の科学〉と〈法の詩学〉――」,『法哲学年報』, 日本法哲学会編, 104–115 頁。

川原美江（2014）「『フォルク』のいない文学：ヘルダーからグリムにいたる民衆文学の構築」,『ドイツ文学』第 148 号, 140–157 頁。ゲルハルト・ライブホルツ（1965）「フォルク（Volk）, ナチオーン（Nation）, ライヒ（Reich）：その概念と今日の意味の変化」（林田和博訳）,『法制研究』第 32 号, 九州大学法政学会, 1–38 頁。

嶋田洋一郎（2007）『比較社会文化叢書 V ヘルダー論集』花書院。

橋本孝（2000）『グリム兄弟とその時代』パロル舎。

濱田真（2014）『ヘルダーのビルドゥング思想』鳥影社。H. カントロヴィッツ（2006）「サヴィニーと歴史法学派」（稲福日出夫訳）,『ヤーコプ・グリム　郷土愛について――埋もれた法の探訪者の生涯――』, 東洋企画, 293–322 頁。

村上淳一（1985）「ヤーコプ・グリムとドイツ精神史――「フォルク」の概念を中心として――」『現代に生きるグリム』岩波書店, 57–100 頁。

ヤーコプ・グリム（1989）「法の内なるポエジー」,『ドイツ・ロマン派全集　第 15 巻』（小澤俊夫ほか訳）国書刊行会。

ヤーコプ・グリム（2017）『ドイツ語文法　第 1 巻第 1 版　序文』（高田博行訳）,『グリム兄弟言語論集』（千石喬, 高田博行編）ひつじ書房。

山内規嗣（2010）『J・H・カンペ教育思想の研究　ドイツ啓蒙主義における心の教育』ミネルヴァ書房。

山崎彰（2023）『近代ドイツ農村社会の誕生　領地文書から見た開発・紛争・教育』刀水書房。
ユルゲン・コッカ編著（2000）『国際比較・近代ドイツの市民』（望田幸男監訳）ミネルヴァ書房。
ヨーハン・ゴットフリート・ヘルダー（2018）『ヘルダー民謡集』（嶋田洋一郎訳）九州大学出版会。
若尾祐司編著（1998）『家族』ミネルヴァ書房。